

学力検査問題「国語」(その一)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

1 次の文章を読んで、問一～問七に答えよ。

加藤周一さんは、日本人の死生観一般をこういうふうにまとめています(加藤、一九七五)。

一般に日本人の死に対する態度は、感情的には「宇宙」の秩序の、知的には自然の秩序の、あきらめをもつての受け入れということになる。その背景は、死と日常生活上との断絶、すなわち、死の残酷で劇的な非日常性を、強調しなかった文化である。(『日本人の死生観』)

「今日」の生をそれとして生きることと「明日」の死(後)へ向かうこととの間に、そう大きな断絶がないのは、そこに大きな宇宙や自然の秩序の「あきらめをもつての受け入れ」があるからだ、という指摘です。

日本の文化が「死と日常生活上との断絶、すなわち、死の残酷で劇的な非日常性を、強調しなかった文化」だということについては、つとに、民俗学者の柳田国男(一八七五―一九六二)が、「日本人の死後の観念、すなわち霊は永久にこの国土のうちにトドまって、そう遠方には行つてしまわないという信仰が、おそらく世の始めから、すくなくとも今日まで、かなり根強くまだ持ち続けられている」(『先祖の話』)と指摘していることは周知のことです。死者は、とてつもない異世界に行くのではなく、生者と同じ世界にとどまって、なお生者を見守りつつ、また時おりは往き来もする、という死者―生者観です。生と死の世界の連続性・一体性の信仰ということができます。

生と死の世界の連続性とは、たとえば、志賀直哉(一八八三―一九七一)の、次のような感受性に見られるものでもあります。

自分の心には、何かしら死に対する親しみが起っていた。……

ある朝の事、自分は一匹の蜂が玄関の屋根で死んでいるのを見つけた。……それは三日ほどそのままになっていた。それは見ていて、いかにも静かな感じを与えた。淋しかった。他の蜂が皆巢へ入ってしまった日暮、冷たい瓦の上に一つ残ったシガイを見る事は淋しかった。しかし、それはいかにも静かだった。

夜の間にひどい雨が降った。朝は晴れ、木の葉も地面も屋根も綺麗に洗われていた。蜂のシガイはもうそこになかった。……自分はその静かさに親しみを感じた。……

……生きている事と死んでしまっている事と、それは両極ではなかった。それほどに差はないような気がした。(『城の崎にて』)

ここで志賀が蜂の死を通して感じた「死に対する親しみ」とは、われわれの死もまた蜂のそれと A であるという発見から来ています。つまり、それらはいずれも、大きな自然の秩序のなかでのあたりまえの出来事であり、そこでは「生きている事と死んでしまっている事」とが「両極」ではないという認識から来るものです。

志賀もふくめて、近代日本の知識人には、「死んだら無になる」という死生観が多く語られます。しかし、その「死んだら無になる」というのは、前章での広井さんが指摘した、いわゆる死生観のクウドウ化でのそれではありません。ここでの「無になる」は、まったく何も無くなるということではなく、そこから出てきた宇宙・自然に帰る、もどるという意味合いでの、いわば大いなるグラウンドとしての「無」ということができます。

医師で作家の南木佳士さんの『ダイヤモンドダスト』のなかでは、ある人が飛行機で海にツイラクして死を意識したときの様子がこのように描かれています。

誰かこの星たちの位置をアレンジした人がある。私はそのとき確信したのです。海に落ちてから、私の心はとても平和でした。その人の胸に抱かれて、星たちとおなじ規則でアレンジされている自分を見出して、心の底から安心したのです。(『ダイヤモンドダスト』)

むろん「アレンジした人」というのは、これまで B とも C とも言い慣わされてきたものの譬喩でしょうが、この星たちをこういうふうにアレンジしているものがあるとすれば、その働きは、今自分の生き死ににもはたらいっているはずだという思いであり、それが自分を「心の底から安心」させたということです。われわれの死―生もまた、宇宙・自然の秩序のこと、「おのずから」のこととしてあるという認識です。

日本の古い言い方ですが、「おのずから」とか、あるいは「自然(に)」という表現で、「万が一自分が死んだならば」という意味を表す用法があります。むろん当時においても、「おのずから」「自然(に)」というのは、ごくあたりまえのこと、当然のこと、という、今と同じ意味合いで使われてもいたのですが、それが同時に、こうした使い方がなされているところにも、今見てきているような、生と死とを「両極」に分けてしまわない発想を見出すことができます。

われわれからすれば、死というのは、まさに「万が一」のことですが、しかし、大いなる宇宙、自然の方から見れば、それはまさにあたりまえのことにすぎないのだという説得の知恵が、こうした言葉遣いのなかには、はたらいているということです。

(竹内 整一、「日本人はなぜ「さようなら」と別れるのか」より)

学力検査問題「国語」(その二)

(2023 一般Ⅱ)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

※ 本文の漢字には、問題作成者が必要に応じてふりがなを付けた箇所がある。

※ 広井さん 二〇〇四年開催のシンポジウム「死生学の構築」のパネリストの一人、医療政策の広井良典氏。

問一 傍線部①～④について、カタカナを漢字に直せ。

- ① トド ② シガイ ③ クウドウ ④ ツイラク

問二 空欄 A に入る最も適当な言葉を、ア～オから選び、記号で記せ。

- ア 同格 イ 同一 ウ 等類 エ 等価 オ 平等

問三 空欄 B、C に入るにふさわしい漢字一字を、それぞれ記せ。

問四 傍線部(1) 「つとに」が、意味上修飾する語を文中から抜き出せ。

問五 傍線部(2) 「それは両極ではなかった」について、次の a、b に答えよ。

- a このようなとらえ方を端的に表現した語句を、文中から十字前後で抜き出せ。
b 「両極」ととらえた場合の死生観を、本文の内容を踏まえて三十字以内で説明せよ。

問六 傍線部(3) 「アレンジしているもの」は具体的に何のことか。文中から十字以内で抜き出せ。

問七 傍線部(4) 「おのずから」が二つの意味を表すことから、どのような死生観が読み取れるか。本文の内容を踏まえて六十字以内で説明せよ。

学力検査問題「国語」(その三)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

2

次の文章は、三木 清『読書と人生』に付された解説文である。これを読んで、問一～問九に答えよ。

さて、読書論である。ここで注目すべきことの一つは、「読書は技術である」という視点、したがってまた「本を〔道具と同じように〕使う」という視点であろう。これは読書の方法が「主体化され、個別化されて」「身につく」ということが肝要だということだ。^① ガイネン^{※がらん}の伽藍を構築しようというのではなく、論文を書くためにでもなく、「ほんとうに哲学することの困難を知るために、もつとフランスのものが読まれることが望ましい」と三木が書きつけていることは先にもふれたが、歴史においても人生においても、そこに測鉛を深く垂らすためには、論理の緻密さに経験の厚みと直感の深みとが伴わなければならない。本書には収めてないが、のちに「哲学ノート」（昭和一四年）のなかでレトリック（修辞）という価値の復権を説いて、^①「自己の魂のうちに深い混沌、闇を満たえる者^たにして初めて、何が明晰であり、何故に明晰が求められるか、を真に理解することができる」というのも、このことを言っている。だからこそ、「直観も訓練によって育てられるものである」ということ、その訓練は論理的訓練にも増して厳しいものであるということ」（「哲学はどう学んでゆくか」、昭和一六年）を A に銘じなければならないというのである。

そういう議論を踏まえたうえで、三木の読書論のなかでわたしがもつとも惹かれた文章を挙げるとすれば、次のような一文になる。

哲学において重要なのは、物の見方であり、考え方であり、方法である。結論でなく、過程が、方法が特に大切なものであるところに哲学的啓蒙の特殊な困難がある。然るに方法は、その方法が生きて生産的にはたらいっているところにおいて最もよく学ばれ得るものである。：

：科学としての哲学の理念と共に教育としての哲学の理念をたてたところにプラトンの偉大さが忍ばれる。啓蒙的、教育的、指導的精神と云えば、何か嫌なものに感ぜられるかも知れないが、とにかく、ひとに呼びかけるといったところが偉大な哲学には含まれているようである。そういうものの欠乏が哲学をむつかしく思わせているのではないか。^② 独語的な哲学はむつかしい。

（「哲学はやさしくできないか」、昭和七年）

哲学が「独語」であってはならないというこの指摘は、哲学がそのとば口で「むつかしい」という印象を与えて人びとを哲学から遠ざけてしまふ、その理由を示している。この国の哲学書が漢語だらけの生硬^②な文章で書かれているのは、その思想が難解であるからよりも、このことをだれかにどうしても伝えたい、呼びかけたいというふうに、宛先がつよく意識されていないからである。哲学のそういう独りよがりを、三木は危ぶむ。

^③ 読書は対話である。あまりにもあたりまえのことであるが、最後にわたしが考えるこのことの意味を、（もし三木が生きていたらという仮想のもとでいうのだが）^④ かれに後押ししてもらっている気持ちで書いておきたい。

読書というのは、じぶん以外の人の書き物にふれるなかで、じぶんが打ち砕かれる経験である。おなじものを見ながら（わたしとはちがつて）こんなふうを感じ、こんなふうを受けとめる人がいるのか、あるいは、おなじような体験をしながらそれにこんな問いを向ける人、こんな問い方をする人があるのか……という経験である。そしてそうした別の捉え方、別の問い方にふれることで、じぶんがこれまで抱えてきた問題、じぶんがそこに溺れていた困難が、ぐいと別の問題、別の困難にずらされる、あるいはそれらがもつと見晴らしのよい場所に置かれるようになる。要するに、読書をとおしてわたしが別の眼をもつようになること、ここに読書が対話であるゆえんがある。そういう経験が深ければ深いほど、わたしは以後、まずは、その人が感じ、考えるようにしか考えられなくなる。まるでわたしの細胞がぜんぶ入れ換えられたかのように。そういうふう^③に更新されたわたしの眼はまた、別の書物との出会いのなかでさらなるヘンヨウを経験してゆく……。

これはじつは、過去の著者の書き物、あるいは同時代を生きても会ったことのない著者の書き物についてのみならず、いままさにわたしがだれかとしている語らいや議論においても起こることである。わたしがこれまで研究会や「哲学カフェ」[※]などで経験してきたことだが、話も終盤にさしかかって、「これだれの意見だったつけ……」とそもそもだれの意見だったかわからなくなるというのが、^⑤ いいデイスカッションである。その意味で、読書は文字どおり対話なのである。

読書は、ひとりで集中してなすもの、自己のうちに沈潜するためになすものという思い込みがあるが、以上のように考えれば、読書でめざされているのが対話であることはあきらかだ。読書は、自己に閉じこもるためになされるものではなく、（著者という）他者との対話のなかにじぶんを開いてゆくためになされる。そのなかで、じぶんを揺さぶる、じぶんを他の視点から見なおす、そういう出来事が起こる。とすれば読書の場と議論の場とは、対話ということを通じている（最近、いくつかの図書館が、「静かに」という声にコウして、読書室・自習室と隣り合わせに対話やカンファレンスの部屋を併設しようとしているのは、正しい試みだとおもう）。

読書は、さきにも述べたように、まずはじぶんが打ち砕かれる経験として始まる。そしてそうした打ち砕かれと更新とのくりかえしのなかで、これまでの人生でじぶんが依拠してきた自己理解の《初期設定》が書き換えられてゆく、あるいは同時代の B 理解の《フォーマット》が差し換えられてゆく。ときには少しずつ、ときにはごくそつと。本文中で三木は、「多くのことを考えさせる本が善い本」だと書いているが、それをいいかえれば、ある体験、ある出来事について問いを重ねるとき、いったいどれだけ多くのコンテクストをもちうるかということに、

学力検査問題「国語」(その四)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

※ 「教養」の意味がかかっているということでもある。

(鷲田 清一、『対話としての読書「独語的な哲学」ではなく」(三木清「読書と人生」の解説)より)

※ 本文には、問題作成者が必要に応じて漢字にふりがなを付け、記号を省略した箇所がある。

※ 伽藍がらん 寺院の建築物。

とば口 入り口。

「哲学カフェ」 進行役のもと、さまざまな人が哲学的なテーマを話し合う催しのこと。パリのカフェで始まった。

カンファレンス 討議、会議。

コンテキスト 文脈。

「教養」 三木の考える教養とは、今日のように文化面に偏ったものではなく、より政治的なものであった。

問一 傍線部①～④について、カタカナを漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記せ。

- ① ガイネン ② 生硬 ③ ヘンヨウ ④ コウ

問二 空欄 A に漢字一文字で適語を入れよ。

問三 傍線部(1)について、「自己の魂のうちに深い混沌、闇を湛たえる」ためには何が必要か。文中から十二字以内で抜き出せ。

問四 傍線部(2)「独語的な哲学」とはどのような哲学か。二十五字以内で説明せよ。

問五 傍線部(3)「読書は対話である」とあるが、「読書」と「対話」の共通点を四十字以内で説明せよ。

問六 傍線部(4)「かれに後押ししてもらっている気持ちで」とあるが、なぜこのように言えるのか。それを説明した次の文の空欄部を二十字以内で埋めよ。

筆者の「読書は対話である」という考えは という三木の考えに通じるから。

問七 傍線部(5)「いいディスカッション」はどのようなものを指すか。最も適当なものを、ア～オから選び、記号で記せ。

ア 話が終盤にさしかかるとそれまでの細かな発言内容を忘れてしまうことがあるが、そのような失敗も堂々と発言できて気楽に参加することのできるディスカッション。

イ 議論が参加者の血肉と化してしまったために、もともとは特定の個人から発せられたはずの感じ方・考え方・意見の最初の発信者がわからなくなってしまうディスカッション。

ウ 何度も議論を経験して自分の考えにこだわらなくなった人が多く参加することで、よりたくさんの客観的な成果が得られるようになったディスカッション。

エ 自己に閉じこもらず、対話の中に自分を開いてゆくのがよい読書であることと同じように、最終的に自己と他者との区別を感じなくなるほどうち解けあうディスカッション。

オ 議論の内容が参加者すべてに十分に消化・吸収された結果、その後各人が取るさまざまな行動にその時の議論内容が影響を与えるようなディスカッション。

問八 空欄 B には何という言葉が入るか。最も適当なものを、ア～オから選び、記号で記せ。

ア 歴史 イ 哲学 ウ 論理 エ 問題 オ 思想

問九 筆者の考える望ましい読書とはどのようなものか。最も適当なものをア～オから選び、記号で記せ。

ア 科学としての哲学を学んで自己を革新していくために、教育的対話を繰り返し実践するもの。

イ さまざまな国の哲学を身に付けることで、論理的な考えを基本的な素養として実行するもの。

ウ どんどん他者の考えを取り入れて、自己の問い方・感じ方を新しくしていくためのもの。

エ 人と話し合ったり議論したりすることをも読書の一形態として認める、より包括的なもの。

オ まず自己の認識を一度失う経験を不可欠と考え、それを克服した上で初めて身につくもの。

学力検査問題「国語」(その五)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

3

次の文章を読んで、問一～問五に答えよ。

「無機的な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜目がない、或る経済的大国」——これは、一九七〇年に自決した小説家三島由紀夫が、死の直前に喝破した未来日本の姿である。周知のこの暗い予言が、昨今しきりに想起されてならない。きっかけは今春から実施される高校の国語改革である。

文部科学省の方針によれば、必修の「現代の国語」では小説が除かれ、選択科目も従来の「現代文A/B」から「論理国語」と「文学国語」に変わるという。前者で実用的文章、後者で文学作品を扱うらしいが、もし三島が生きていたら、なんと言うだろうか。

そもそも小説に論理はないのか、という疑問は誰しも抱く。三島が綴った作品の中に、生の美学と倫理を析出させる「論理」があったとすれば、今回の国語改革はまさに暗い予言を実現させる軽挙妄動ではないのか。

三島が自決した時、私は大学生だった。左翼学生運動の最盛期で、三島と全共闘との対話集会もひらかれた。当時をふりかえると、やはり三島を政治的右翼と決めつけることには躊躇してしまふ。「君たちは崇高な理想のために命を捨てる覚悟があるのか？」——そう小説家は問いかけたかったのではないか。

三島は絶望のうちに命を絶った。半世紀が過ぎた現在、日本がどうなったかを見極める責務はわれわれにある。

指摘するまでもなく、論理的に処理すべきデータ量は一挙に増した。^①データは二十一世紀の石油だと言われるが、AI（人工知能）など情報技術の進歩により人間の主体性は脅かされつつある。ゆえにAIに負けぬ論理的能力を鍛え上げよという意図自体は正しい。問題は具体的方法である。

最近の若者はきちんとものを考えないという嘆きの声は高いし、形式的な論理で解けるパズルの正答率が低いという調査結果は有名だ。これが国語改革の一因となったという噂もある。

だが、長年「情報と人間」について探究してきた者として言っておく。AIに負けぬ思考力を育てるためには、^②数行のパズルを解く能力とは全く異なる能力を鍛えねばならないのだ、と。

なぜなら、正解のあるパズルやクイズを解くのは、むしろAIの得意技だからだ。AIは言葉の意味を理解できないが、形式的な記号操作によつて迅速に正解にたどり着くことならできる。一方、人間にしかできない論理的能力は、もつと複雑で高い次元にある。たとえば風刺や反語をふくむ長文の内容を理解し、著者の隠された真意をつかむ、といった「論理」もある。そんな芸当はAIには不可能なのだ。

そして実際のビジネスや対人交渉においては、表面的なデータ処理能力よりむしろ、身体的直観や共感にもとづく高度な推論や判断の能力が求められる。そういう感性や想像力を養ってくれるものこそ、小説をはじめ文学作品ではないのか。

実は、形式的な記号操作によつて社会の現実問題を解決しようとした失敗例もあるのだ。第五世代コンピューター開発プロジェクトである。日本の経済が最高潮だった一九八〇年代、当時の通商産業省の主導で産官学の知を結集し、世界に先駆けた斬新なコンピューターをつくらうという野心的な試みが行われた。

巨額の費用とエネルギーを費やしたあげく、結局は実用化されずに終わった悲劇のプロジェクト。短期間だが参加した研究者の一人として、残念な記憶がある。形式的推論の効率を極限まで追求し、技術的には成功したにもかかわらず、実用にならなかった理由は、^④人間社会で大事な論理はパズルのような次元にはないという点を見落としたことだった。日本人はもつと過去の失敗に学ぶべきではないのか。

論理性を高める教育の重要性は言うまでもない。ただしその際「論理性とは何か」について、より広く深く考え直してみるべきなのだ。そういう真剣な努力が、三島の恐れた亡国の危機からわれわれを救うのである。

(西垣通、『毎日新聞』二〇二二年三月三日朝刊「科学技術と人間」より)

学力検査問題「国語」(その六)

(2023 一般Ⅱ)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

問一 傍線部①～③について、本文における読みをひらがなで記せ。

- ① 喝破 ② 脅 ③ 斬新

問二 傍線部(1) 「データは二十一世紀の石油だ」について、同じ修辞法が用いられているものを、ア～オから一つ選び、記号で記せ。

- ア 「大切なのは、普通のことばで非凡なことを言うことだ」(ショーペンハウエル)
イ 「想像力は、知識よりもっと大切なものである」(アインシュタイン)
ウ 「人生は、一行のボオドレエルにも若^しかない」(芥川龍之介)
エ 「死に至る病とは、絶望のことである」(キルケゴール)
オ 「約束を守る一番いい方法は、決して約束をしないことである」(ナポレオン)

問三 傍線部(2) 「数行のパズルを解く能力」、同(3) 「人間にしかできない論理的能力」について、同じような意味の表現を、文中からそれぞれ十字程度で抜き出せ。

問四 傍線部(4) 「人間社会で大事な論理はパズルのような次元にはない」とは、どういうことか。六十字以内で説明せよ。

問五 本文の表題として適当なものを、ア～オから一つ選び、記号で記せ。

- ア 三島由紀夫の残したもの イ 日本の失敗 ウ 国語改革の必要性
エ 「論理」に学ぶ オ 「論理性」を考え直す

2023 般 II	驗 受 番 号	
-----------------	------------------	--

[illegible]

							②
問七	問六	問五		問四		問三	問一
							①
問八							
							②
問九							
							③
							④
							問二

3							
問五		問四			問三		問一
				(3)	(2)	①	

1

問一	問二	問三	問四	問五		問六	問七			
① 留	工	B	指摘している	(b)		宇	人	か	ら	
		神		死	宙	間	め	ら		
		c		は	・	に	す	て		
	仏	生		自	と	れ	受			
②	死骸				の	然	っ	つ	ば	け
③ 空洞					の	の	の	て	あ	入
					世	営	の	万	た	れ
					界	み	で	が	り	る
					の	で	あ	一	ま	し
					連	あ	る	の	え	か
			続		る	。	死	の	な	
④ 墜落							性	常	は	宇
		生		宇			と	と		
	活	宙		に			い	う		
	を	や		す			死			
				断	自	や	ぎ	ず	死	
				絶	然	自然	の	、	生	
				さ	の	秩	観	。	観	
				せる	秩序	あ	き			

2

問一	①	概念	問三	経	問四	誰	問五	他	問六	す	問七	イ	
②	セイコウ		験	の	か	の	者	ぐ	ア				
			の	に	の	れ	問八						
			厚	伝	異	た							
			み	え	な	哲							
③	変容	と	た	る	学	ウ		問九					
		直	い	考	に								
		感	と	え	は								
		の	い	方	視								
④	抗	深	う	に	と	問二	肝						
		み	意	ふ	を								
			識	れ	手								
			が	る	に								
			欠	こ	入	か	れ	と	で	、	こ	れ	ま
			如	と	し	て	い	る	哲				
			し	て	い	る	哲						
			て	い	る	哲							
			い	る	哲								
			る	哲									
			哲										

3

問一	①	かつぱ	問三	(3)	(2)	問二	ウ
			高	形			
			度	式			
問五	判	の	人	な	的		
オ	断	能	間	推	な	②	
	能	力	社	論	記	おびや	
	力	と	会	や	号		
	で	異	に	判	操		
	あ	な	必	断	作	③	
	る	り	要	の		ざんしん	
	と	、	な	能			
	い	感	論	力			
	う	性	理				
	こ	や	能				
	と	想	力				
	。	像	と				
	力	は					
	に	、					
	よ	デ					
	る	ー					
	高	タ					
	度	処					
	な	理					